九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世・近代非母語話者による日本語敬語研究の位置付け ： ロドリゲス、ホフマン、アストン、チェンバレンを中心にして

青木，志穂子

https://doi.org/10.15017/1485056

出版情報：九州大学，2014，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名　：　青　木　志穂子

論文題名　：　近世・近代非母語話者による日本語敬語研究の位置付け

―ロドリゲス、ホフマン、アストン、チェンバレンを中心にして―

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本研究は、近世・近代における日本語非母語話者（以下「非母語話者」）による体系的な敬語研究が、日本語母語話者（以下「母語話者」）による敬語研究とどのような関係にあり、日本の敬語研究史上どのような位置付けになるのかについて究明するものである。

人は、発話の際、相手との関係性、場面、状況に応じ、適切な語彙、文法形式、表現を選択する。そうした言語現象の一つである「敬語」は、どの言語においても起こる現象であるにもかかわらず、日本語に触れた非母語話者は皆一様に、日本語における「敬語」のあり方に注目する。その結果、非母語話者だからこそ持ちうる「ソト」からの視点に立つ敬語研究が、古くは 16 世紀後半からなされてきた。

もちろん日本語を母語とする「ウチ」からの視点に立つ敬語研究も江戸時代初期からなされてきたが、体系的研究といえるものが登場したのは明治以降のことである。

当該分野における先行研究では、国内外の日本語に関する記述のある資料を網羅的に調べることなく、主な西洋人による文法書を時系列に並べるものが多い。その原因は、資料選定の際に地域的偏りがあり、研究者の属性など資料にかかる様々なフィルターが考慮されていないためである。

そこで本研究では、網羅的、多角的に資料を分析した上で、「ソト」から観察されたからこそ意義が見出せる敬語研究を研究対象として選定し、「ウチ」から観察された敬語研究と、敬語と人称の関係性の解釈に相違があるか比較した。その結果、「国語」と「日本語」という二重性の構造が明確になり、近代日本の「国語学」成立に「ソト」からの視点が不可欠であったこと、非母語話者による敬語研究が、敬語研究史において独自の位置を占めていることを論証した。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章序論では、本研究の目的、意義、先行研究、研究課題、研究方法について述べる。

第 2 章では、国内、中国、朝鮮、西洋（キリシタン、オランダ、ドイツ・フランス、ロシア、英国、米国）の各資料を幅広く分析した上で、敬語研究史の初期の段階から体系的といえるのは、いわゆるキリシタン資料、オランダ資料、英国資料の中にあること、それ以外の資料は、語彙や音韻の研究には利用価値が高いが、敬語に関する記述が少なく、本研究の目的を達成するには不十分と言わざるをえないことを明らかにする。

次に、近代ヨーロッパの言語学史を（1）ラテン語文法の枠組を基本とした時代、（2）言語の同系性や共通祖語の枠組み構築の時代、（3）近代言語学が成熟し、言語研究の方法が変化し始めた時代の 3 期に区切った上で、19 世紀までの西洋人による日本語研究史を 3 期に分ける通説と並べてみると、両者が連動していることに着目し、各期における代表的人物とその著書を、下記のとおり、本研究の対象として選定した。

第 1 期：①イエズス会宣教師ロドリゲス（João Rodriguez, 1561?-1633）Arte da Lingoa de Iapam（1604-1608）

第 2 期：②ライデン大学教授ホフマン（Johann Joseph Hoffmann, 1805-1878）Japansche Spraakleer（1867）

第 3 期：③外交官アストン（William George Aston, 1841-1911）A Short Grammar of the Japanese Spoken Language（1869）、A Grammar of the Japanese Written Language（1872）、及び④帝国大学博言学科教授チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)（1886）、A Handbook of Colloquial Japanese（1888）

第 3 章では、それぞれの著書を分析し、各研究者の各敬語観を探る。即ち、①は日本語をラテン語文法の枠組にあてはめ、敬語を表現のスタイルという観点で捉え、②は「進化論」の影響から、言語も生成・発展するという言語観の下で敬語を分析し、③は西洋文法と江戸時代の国学者による国文法の融合を図り、④は当時の言文一致運動を牽引したことを明らかにする。

第 4 章では、上記 4 名全員が言及した「文末に現れる敬意表現」を取り上げる。「ハベリ」「ゴザル」が素材敬語から対者敬語へと変遷していく中、ロドリゲス、ホフマンは、両方の性質が並立すると解釈し、さらに「ゴザル」が対者敬語「マス」に変化していく中、アストンは「丁寧」（courteous）、チェンバレンは「単なる儀礼的な話し方の印」（mere marks of a courteous style）と解釈したことを読み解く。

第 5 章では、明治以降の母語話者の敬語研究者、三橋要也、松下大三郎、三矢重松、山田孝雄の生涯と業績を検討した上で各敬語研究を比較し、「ウチ」からの視点による敬語研究の代表は、山田の『敬語法の研究』（1924）であることを論証する。さらに、ロドリゲスからチェンバレンへと受け継がれていった敬語使用条件と、山田の提唱する敬語と人称の法則性を比較して、両者の解釈の相違を検討する。

第 6 章結論では、第 5 章までで得られた知見に基づき、国語学は母語話者が研究してこそ国語学だとする山田の説と、国語学は他の言語との比較の中でこそ成立するという上田万年の説を比較する。その上で、非母語話者が「言語学」の知識を持ち込み、その科学的方法を伝えたからこそ、近代日本において「ウチ」「ソト」の両視点から捉えられる「国語学」という新しい分野が確立したことを述べる。